第５回青梅市総合長期計画審議会会議録（概要版）

１　日時　平成２４年２月２２日（水）午前１０時～正午

２　場所　青梅市役所　２階２０１・２０２・２０３会議室

３　出席委員

篠原委員、舘委員、米村委員、山井委員、杉村委員、安間委員、志村委員

稲葉委員、岩田委員、村野委員、林委員、島田委員

４　議事

(1)　会長あいさつ

(2)　説明事項

①　資料説明

②　基本構想素案について

(3)　委員意見交換

(4)　その他

①　次回の開催等について

②　その他

（配布資料）

資料１　第４回審議会意見等の分野別整理

資料２　第６次青梅市総合長期計画基本構想素案-第５稿-

資料３　青梅市総合長期計画審議会委員の目標・宣言のまとめ

資料４　イベント・観光施設の観光客数の推移

第　５　回　審　議　会　会　議　録　（　概　要　版　）

発　　言　　者	発　言　概　要
	（開会）
会長	各委員からたくさんの意見をいただきました。今日も活発な議論をお願いします。資料の説明と審議の趣旨を事務局から説明してください。
事務局	今後の策定スケジュールおよび配布資料について事務局説明
会長	説明がありましたが再確認しておくと、今日議論しているのは基本構想であって、これが大体まとまったら、市議会に中間報告で出します。市民のパブリックコメントを求めます。それで一応まとまったら、来年度に入って具体的な基本計画の議論をします。それを今年の１２月ぐらいに、また議会に報告するということです。 ということなので、今日の議論は、この３月段階でまとめる基本構想について議論をしたいということです。 まだ十分時間がございますので、今の説明について、質問、あるいは、御意見がございましたら、どなたからでもどうぞ。
委員	１６ページに書いたまちのあり方の視点で持続可能なという表現、またその下の財政についても、持続的な行財政運営という、この持続的という表現が、結局、死なないで生きるための都市を目指すとか、あるいは、健全な経営のためということじゃないかと思うんだけれども、非常に違和感を持って受けとめているんです。こういう市政とか行政では一般的な言葉なのかもしれませんけど、これについて、なぜ、この持続可能という表現をしているのか説明をお願いしたい。
事務局	全体的に、まちづくりのハードもソフトも進めるに当たって、将来世代に影響というか負担を与えずに今の社会のあり方を構築して、運営していくという前提のもと、財政につきましても、いわゆる自主財源の確保をもって継続的な運営が図れるような行財政運営に努めていくという趣旨でとらえています。
委員	説明を受けないとわからないんですけど、持続的というのは、副詞的な使い方で、次に名詞が来ると何を持続するのかわからない。例えば、参考資料の中に健全な財政運営、それで、１０番目に持続的な行財政運営という、この持続的健全なとかが書いてあると、なるほどとわかるんだけれども、一般の人が見たら非常にぼやけちゃうんじゃないかと思うんです。
会長	僕が答えるわけじゃないんですけど、サスティナビリティという概念が入ってきて、それを持続可能性というふうに訳しているんで

	す。何でそんな話になってきたかというと、生物多様性条約というのが国際間で取り決められていて、遺伝子と種と生態系ですか、この３レベルでという。つまり、多様性を確保しないと、非常に単一社会になってしまう。生物もそうですけど、何かが起こると全部なくなってしまう。それこそサスティナビリティがない、ないかあるかっていうことで問題になっていて、生物多様性はそういう話なんです。青梅ではちょっとぴんとこないと思いますけど、私が仕事で田舎に行ったりすると、もう６５歳以上は人口の半分ぐらいとか、農業はもう後継者がいないとか、現実にもサスティナビリティが危ない村とか集落というのが結構あるんです。だから、日本全体としても人口が減少して非常に高齢化しているという話なので、サスティナビリティというのは、今、日本が直面している社会のキーワードになっていることは確かです。 だけど、健全な財政運営と書いてあって、１０本の柱の方では持続的な行財政運営と書いてあったら、これは別に健全なぐらいでもおかしくない。それでいいと思う。ただ、まちのあり方で、青梅が健全にずっと生き延びていきますよというのを示すので、３章の４で持続可能な都市を目指すと書いてあるんだと思います。 生き延びてっていうのは、少し生々し過ぎる。そんなことで、無理に持続可能とか持続性って使わなくてもいいところは修正した方がいいと思います。 大分議論して皆さんが案を出してくれたので、気が抜けたというわけじゃないと思いますが、まだまだ練り上げていった方がいいと思います。 それから、冒頭に、今日の議論は、一応、基本構想でまとめるところが中心ですよと申し上げましたけど、そんなに人間の頭は、すっきり割り切れるわけではないので、発言としては基本計画の具体的な方向に踏み込んだ話があっても別に構わないと思います。それは、いずれ４月以降生きるわけですから。 いかがでしょうか。
委員	今まで、例えば土地というものが、余らない、余さないで全部使うみたいなのが、これまでの日本の土地政策というんでしょうか、あいている土地はどんどん開発してというのが今までのやり方だったと思うんですが、例えば今、土地の所有権と利用権を分けてまちを運営しましょうというような考え方もあちらこちらで出てきていますが、民間の土地をそれをするためにはなかなかハードルが高いかと思うんです。反面、いわゆる官が持っている土地、例えば東京都、国、青梅市の土地で、青梅市なども、持っている土地は全部使わないと市民に申しわけないんじゃないかというような発想でいらしたのかなと思うんです。 今、市役所の前に、ケミコンの跡地という非常に広い土地をお持ちですよね。昨日あたりのニュースを見ていましても、文部科学省の方で、東京に震度７の地震が来る可能性があるという発表があったばかりで、どこからどこまでが地震がこう揺れるというのを見ますと、どうも青梅の、このちょうど市役所あたりを基準にして揺れが大きい区域と、それほど揺れない区域というのが、どうもこの青梅市役所あたりかなという気がするんです。 そうなってきたときに、大きな地震が東京都を襲ったときに、立

	川を防災の拠点と考えているようなお話も聞いていますが、その二次的な場所として、青梅市のポジションは非常に大きいのではないかなという気がするんです。 　そうしましたら、ケミコンの跡地に医療に関して重点的な施設が建つというようなことを聞いておりますので、あえて残しておく。民間の土地ですと、あなたの土地、使わないでくださいということは難しいかと思うのですが、あれだけの土地を、例えば東京広域にボランティアが入ってくる受け入れのためのスペースとして青梅市が確保しておくとか、例えば救急用の医療テント村といったような。総合病院のヘリポートを使えば、万が一のときには、青梅市という存在が、東京都民の命を助ける基地になりえるのかなというようなこともありまして、あえて土地を残しておく。それこそただ芝生を張って、いざとなったらペグが打てるように、テントが建てるような、最低限の施設だけして残しておくというような、無駄かもしれないけど、そういったものを用意しておくということも考えてはいかがかなとも思います。
会長	質問ということではなくて意見だと思うんですけど、この１０本の柱でいくと、安全・安心、安全で快適に暮らせるまちの防災のところと、土地利用にかかわるわけですから、８番の都市基盤と、この両方にかかわって、防災的な観点から、余り効率を追い求めないで、専門用語で我々はリダンダンシーと言うんですけど、冗長性がある、二重だという意味なんですけど、それを確保するような計画というのも必要じゃないかというそういう意味ですよね。 　それは、基本構想のところで書けるかどうかわからないけど、基本計画のところではきっと入ってくると思います。 　ほかにいかがでしょうか。
委員	この構成全体の中で、５番目ですね、まちづくりの基本方向、これに対して青梅市の課題ですか、１０ページに一応ありますけど、ここで書いてある課題というのは、基本方向の裏返しのようなもので、要するに基本方向としてこういうことがあります。そうすると、課題としては、それをやるためには必要であるという、必要という文言がたくさん出ています。それをあえて必要だからやるんだというこの方向はわかるんだけど、本来、この課題というのは、懸念とか、問題点とか、そういうものも込めて、欠けている面とか、難しい面、そこをもっと書いていただいた方がよろしいんじゃないかと思うんです。これ一字一句見ますと、文章なんかも変えているのがありますけど、ほとんど同じであると。項目が１０個あると思いますけど、それが必要である、だからやらなきゃいけないんだという格好になっているんです。この配置といいますか、この課題というものを、これでいいものなのかというのが、全体のこの構成から見て感じたところです。 　何か市の方としてもいろんな御説明あるでしょうから、お聞きしたいと思う。
会長	確かに改めて文章を見てみると、課題っていうのは、こういう問題があって、これは何とかしなきゃいけませんというのが書いてあるんだけど、ここはもうなんか後ろの基本方向みたいな書き方して

	いるから、ちょっと違和感があるんでしょう。
委員	どうもこの必要というのが、第三者的な見方で、こういう問題がありますよって、なんか突っぱねたような感じを受けまして、とても嫌な感じがしたんです。
会長	４ページ目から５ページ目の本市の特性のところには課題が書いてあるんです。例えば②ですが、教育・文化・芸術・スポーツというところにおいては、一番最後ですが、「一方、広い市域に多数存在する教育・文化施設については、老朽化への対応が課題となっています。」と、老朽化というのが問題ですと書いてあるわけ。こういう書き方で書いた方が、いいんだろうね。だから、本市の特性のところはちゃんと課題が書いてあるんだけど、後ろの方は前のめりになっちゃって、行政がやらなきゃいけないですよということばっかり書いてあるから。
事務局	ストーリーとして、青梅の地勢と歴史と、それに、特性ということで、弱みと強みがある。強みは生かし、弱みは克服しなければいけないということで受けとめて、それを今の時代潮流が青梅だけの問題でなく、それがまた青梅に返ってくるというところも踏まえて、それを全体的にとらえた形の中でまちづくりの課題、１０ページ以降につなげるような整理をしたところでございますが、特性とまちづくりの課題の違いというか、表現、字面でとらえた部分でいくと、御指摘のとおりの部分もございます。 ただ、まちづくりの課題があって、それを踏まえて強みを生かし克服するというシナリオを描いて、次の、まちの目標ということで１０個設定してございますけれども、そこにつなげるという流れは意識しておりますが、そこがとらえられないということですと、ストーリーが成り立っていないというところもございますので、委員がおっしゃったようなところを、むしろ、克服すべきものとしてとらえて、次の目標につなげられるように、あるいは、項目として整理できるように考えてみたいと思います。
会長	８ページのところで、２章でまちづくりの課題と克服に向けてと書いてあって、１節の１では、時代の潮流と大震災が残した教訓、これ、日本全体の話が書いてあり、２でまちづくりの課題として青梅のという話になっているわけですよね。 今後の長期計画で重要なのが、いい表現だと思いますけど、青梅の強いところと弱いところがあって、強いところはますます伸ばしていきましょう、弱いところは何とかカバーしていきましょうという話ですよね。だから、この１０ページから書いてあるまちづくりの課題というのは、強みと弱みというようには文章では書きにくいだろうけど、何かそういうように書いたらどうですかね。 こういういいところがあって、これは伸ばしましょうと、こういうところがちょっと弱点で、これからどうにかしなきゃいけませんよねっていう調子でこう書けばいいのではないかと思うんです。
委員	青梅市が、今、直面しているこの問題点、これなんかが書いてあると、その次の目標というのも生きてくるんじゃないかなと思うん

	です。
会長	必要がありますって書いてあるから、課題のことは十分意識して書いてあるので、文章の書き方を変えればいいんだと思うんです。
委員	今、文章をつくられているのでは、課題と克服になっていないんです、第２章は、現状認識、現状分析とニーズみたいな話にすればという気がします。課題と克服ではなくて、多分、克服の細かいものというのは、基本計画の中に１つ１つ出てくるでしょうけど、大枠としての、今の青梅市の現状がどうなのかということを示し、そこで必要とされているニーズがこういうことですよというような回答づけにすれば、多分、現在の文章のままでほとんどがいけるんじゃないかという気はしますけど。それで全体のストーリーの中での位置づけも、そんなに狂わない気もするんですけど。ここはまだ基本構想なので。と思いますけど。
会長	２つ指摘されて、１つは、２章のタイトルを変えた方がいいんじゃないかという話ですよね。
委員	第２章のメインタイトルの、まちづくりの課題と克服に向けてですけど、まちづくりへ向けてのというか、現在の青梅市の現状がこうですよ。必要とされているニーズがこうですよという。２番目の時代潮流と大震災が残した教訓というのは、時代にマッチした分析評価がされていると思うんですが、その後の、２番の指摘されたまちづくりの課題、これ、文章的には課題になっていなくて、ニーズが箇条書きに書かれている。そういうとらえ方すれば、と思いましたが、ほかにもいろいろお考えがある方がいらっしゃるかもしれませんが、それだったらそんなにたくさん書きかえなくてもすむかなと。
会長	いや、まちづくりの課題のところは、ちょっと書きかえた方がいいと思うんです。委員も指摘されているように。これだと問題点が何かというのよりも、先のことを書いちゃっているから。それは、簡単に書きかえられると思うので、それで書きかえた方がいいと思うんですけど。 ２章のタイトルはどうですか。まちの現状認識と課題なんだね、きっと。それで、さっき言ったように強みと弱みと両方書いて、現状認識っていえばそれが書ける。それで、これが問題です。だから、強みを伸ばすにも何か問題、どういうところが問題になりそうだというふうに書けばいい。 それでいいですよね。それの方が、確かにタイトルに合っていると思う。
委員	市民の委員の皆さんの発言をもっともだなと思いながら聞いていたんですけども、私も役所生活の経験がありますので、書かれた皆さんの御苦労もわかりながら話を聞いていたんですが。この原案で見ると、先ほど委員が御指摘されたように、先にまちづくりの基本方向があって、それを前提にして課題のところを整理して書いているんだという、それはわかるんです。

会長	ちょっと先走っちゃった。
委員	ええ。それは非常に整理されて、模範論文みたいな感じの書き方になっているので、一般の方にはちょっと違和感があるんだなという印象を受けました。 それで、私の感じでは、これ、きれい過ぎるので、前も事業評価とそういう議論があったと思うんですけど、むしろ、今の１０年計画の中でやってきたこと、達成できたこと、あるいは、できなかったこと、なぜできなかったのか、そういうようなことをこの中に少し盛り込んで、それが次の計画に向けての新たな課題になるんじゃないかっていう、そういう中身が盛り込まれていた方がいいのではないかなと。 過去の１０カ年いろいろやってきた。成果もあった。しかし、なおこういうことが足りない、もうちょっとここは強化すべきじゃないかという。あるいは、大震災のような新しい事態に対しては、今までの計画では考えていなかった、それをきちんと取り組んでいくべきじゃないかと。そんな感じの、今の時点で過去の成果を踏まえた問題意識、あるいは、課題と、そういう書き振りで書かれると、先に答えがあって、それを前提に課題を書いているんじゃないなっていうのが明確になるんではないかなという。これは、そういうものの作業をやった先輩として、アドバイスの意味で意見を言わせていただきました。
会長	前回言ったイベントとか観光の資料も今日出してもらって、説明してもらって、ざっとながめると青梅大祭以外は軒並み落ちているんだよね。だから、人が余り青梅に来なくなっているんで。それは、余り書いていないと思うんですけど。地方に行くと常套句なんですけど、人口が増えないんで、交流人口増やして、人にいっぱい来てもらって活気を出そうというのが1つのテーマですよね。その観点からいうと、青梅は、このデータだけ見ると危機的だよね。どんどん減っていて、前回話があった簡保の宿というのも、あれは調子が割りといいんですって聞いたけど、平成１３年は5万７千人なのに、４万人になっているので、すごく減っているわけです。基本計画の段階でいいと思うんですけど、こういうのは、やっぱりどうしてこうなっているのかというのを分析して、議論して、どうするのかというのは書く必要があるよね、観光でいうと。
委員	拝見させていただいたんですけども、どうしても今言ったところですかね。必要がありますというのが多いということと、あと、この計画は本来青梅市のものなんですけど、見ていると、例えば少子化の対応とか、あるいは、高齢者が住みなれた地域で過ごすとか、障害者の方も地域とともに自立した生活を送ることがということは、割りと一般論が多いかなって気がして。これは、日本全国の計画ではなくて、むしろ、青梅市ならではの計画なわけなので、もう少し、青梅市の現状は前の方のページに出ていますが、青梅市の現状を踏まえた上で、強いところと弱いところ、例えば福祉関係ですと、高齢者施設は多いけれども、逆に障害者のまちという視点で見るとちょっと弱いとか、そういうところを出した上で、強いところ

	は発展させて、かつ、持続可能にし、その上でまた弱いところは補足というか、カバーするというところを具体的に打ち出した方が、市民の方にとっても恐らくわかりやすかったり、意見が出しやすいのではないかなと思います。
委員	先ほど議論になった持続可能な都市を目指すに関して、ここのところも引っかかっていまして、何となくこの全体の中で、唐突感があるというか、前回の委員会で、基本方向の１０本の柱というのがちょっと多過ぎるんじゃないかという御意見がどなたかからあったと思うんですけど、その辺も頭に置きながら、少し絞り込んで５本の柱というのを前に置いたのかなという。これは邪推なんですけども。何となく収まりが悪い。その前後との関係も明確ではないなという感じがしていまして、ただ、何かうまい方法がないかなと思っていろいろ考えてきたんですけど、ちょっと今の段階ではいいアイデアが浮かばないので、やや収まりが悪いなという意見を述べさせていただくだけになっちゃうんですけども。 それから、持続可能な都市という、この持続可能という言葉に、やはり一般の市民の方がわかりにくいという、それもそうだろうなと。私も随分そういう言葉を使った文章って書いておりましたけれども、一般の市民の方がすっと感覚的にすっとこう入っていく言葉かなっていうと、ちょっとやや疑問があると。 それから、計画の中で持続可能というのは、環境の分野なんかではよく使いますけども、市の財政運営とか、市の今後の将来のまちづくりというところで持続可能と使った場合に、非常に後ろ向きというか、マイナスというか、シュリンクするような印象の計画のような感じも持たれるんではないかなという懸念もありますので、言葉も工夫が必要かなと。悪い言葉ではもちろんないんですけども、長期計画が、どんどんどんどん右肩上がりでいろんなものが伸びていたときは、こういう言葉はなかったんです。それが、高度成長というのが終わって、低成長になってきた中で使われてきた概念だとは思うんですけども、今後の１０年の中で、そんなに明るいことばかりはもちろんないんですけども、とりあえず、ともかく生き延びていこうみたいな感じが言葉で出ちゃうと、ちょっと悲しいかなという気もしますので、その辺は何か工夫が必要かなと。 それから、４番自体の座りの悪さもちょっと工夫が必要かなというふうに思いました。
事務局	最初の５つの視点、１０個の柱、目標は、いろいろまた議論がある部分で、今の現行が５つの柱に対して１０のとらえ方が、それぞれ御意見をいただいておりますし、また、今後進める中で、基本計画も意識いたしますと、この柱が、統廃合というか、少し整理をするということは、ある前提で検討を進めてまいりたいというふうに考えております。 ただ、わかりやすさという点の御指摘も一方でございました。それも踏まえて検討したいと思います。 その前提となるまちのあり方の５つの視点の中で、持続可能性であるとか、そういった視点、考え方を盛り込んでいるんですけれども、事務局といたしましては、１０のまちの目標の中に、この５つの視点がいろんな部分で、要は横串というか、随所で、触れながら

	施策を進めていくということが必要ではないかというところで置いたところです。 　また、そうすることによって地域資源の有効活用ですとか、人と人との支え合いという意味の部分が、いわゆる青梅らしさというか、委員からの御指摘にもある程度対応できるようなことも意識をしておりますが、やはり一般的であるというのは否めないので、青梅らしさというものは意識してまいりたいというように考えております。 　あと、持続可能な、いわゆるサスティナブルのとらえ方につきましては、随分御議論、御指摘もいただいておりますので、使い方は注意をしたいと思います。
会長	僕は余り意見を言っちゃまずいんですけど、一番最初に説明がありましたように、今日の資料でいくと１ページ目ですか。計画の役割で、本市が行うあらゆる行政活動の基本となる最上位計画でありとなっていて、この下には、いろんな計画があるわけでしょう。事業計画だとか、景観の話だとか、都市計画だとか、医療保険とか。 　ですから、これは僕の考え方なんですけど、基本的な、青梅が向かうべき方向というのはなるべくクリアに出した方がいいけど、余り議論して報告書で、これだけできれいにまとまっているというのは、むしろ、避けた方がいいと思うんです。 　つまり、その下で実際に動いていくのに、少しぼんやりしていた方が具体的なプランをつくるときには動きやすいですよね。あまりかちっと書いてあって、これは違うよみたいなことが書いてあると、行政としては動きにくくなるんじゃないかなっていう気がするんですけど、どうですかね。読むとすごく立派な報告書なんだけど、実際には使いにくいという話になると、本末転倒かなという気が。つまり、報告書をつくるのが目的じゃないからね。読んでいてすごいなと思っても、実際の行政活動が活発にならないと意味がないわけだから、と思うんですけど、どうですかね。だから、いいかげんにしろと言っているわけじゃなくて、これだけで自己完結するようなことはやめた方がいいかなってことです。
委員	今までのところの話と違うんですけども。青梅市が目指す１０年後まで、１０年間のこの長期計画の中で、１４万市民が思っていることが、これで入っているかどうか心配なんですけれど。我々は、こういう話し合いの中で、こうだああだといって、青梅がこうなればいいだろうという方向を出す、今、向かっているんですけれども、１４万青梅市民の人は、どういう方向を望んでいるのかどうかというのは、この中には出てきていないんですよね。世論調査の結果、水と緑のすばらしい景観を残すとかあるけれども、１４万の人が思っている方向というのは、ちょっと私にはこれで見えてこないんですけれども、そういう質問はおかしいですか。
会長	いや、皆さんは、それぞれの分野で、青梅市民を代表する委員として入って議論しているわけですが、委員がおっしゃるように、人間はいろんな人がいるから、委員が何かを代表してしゃべっていると思ってもそれから抜け落ちている人はいっぱいいますよね、それはきっと。

	だから、そこのところは説明があったように、一応、たたき台をつくって議会に報告して、その後、市民にパブリックコメントを求めて、意見を盛り込もうとしているわけです。 ただ、そんなの待たないで、委員さんがだれかから聞いた話で、これはこういう意見を持っている人もいますよっていうのが紹介されたって別に構わない。
委員	第２章の８ページの１の②の人口減少社会の到来と超高齢社会の本格化という表題で書いてあるんですけども、前も人口の統計の資料を見せていただいて、青梅市の動向なんかも、過去３０年でしたか、見せていただきましたけども、調べていって思ったのは、青梅の場合、かなり、全国的なベース、あるいは、東京都全体との同一性というのはもちろん同じ傾向というのはあるんですけども、特徴的に見られたのが、３０代ぐらいの、一番の働き盛りで、また、子ども、子育てをしている、そういう年代の人の、どうも自然増と社会増と見てみると、流出が非常に多いんじゃないかなという印象を受けました。 これは、働き場所がないためなのか、あるいは、子育ても含めて、そういう点で難しい問題があるのか、いろんな要因があると思うんですけども、その世代がどんどん出て行くということは子どもも減るわけです。そういう人たちが子供を生んでくれないと増えないわけですから。その辺は、ここでは非常に一般的な表現にしかなっていないんですけども、青梅市ならではの問題というのも、高齢化もそうですけども、労働人口のところが、一番肝心のところ、年少人口を増やす意味でも大事なところが減っていっているという、これを問題としてきちっと押さえて、それがどういう施策になっていくかというのはまた別ですけども、ここの分析の中では述べた方がいいんじゃないかなと思っています。
会長	今、質問された件は、非常に具体的な話なんですけど、答えられますか。
事務局	今回の、２２年の国調の数値から見ましても、実際に、住基の人口よりも国調でとらえた人口の方が６００人弱少なくて、なおかつ、その２０代から３０代の流出が多いという事実、分析が確かにございます。そうすると、多分、３０代ですと、一緒に年少の人口が一緒に流出しているというようなところもあるというふうに考えておりまして、そういった面では、青梅市のとらえるべき大きな課題として、多摩地域でも、福生市と青梅市が、唯一２２国調で、前回調査と比べて減少しているというところがございますので、そこは課題に踏まえたいと思います。 そのことは、委員からも、１つの目標の中で、安心して子育てできる環境と、雇用機会の創出で、子育て夫婦が住み、働けるまちというような御指摘もちょうだいしております。そこをうまく盛り込めるような形をとらえたいと思います。
会長	現状認識はわかりましたけど、なぜ、そのようになっているかという分析はやっているの？そこまではいっていない？

委員	私の周りで、ちょうど小学校の５年生ぐらいの子どもを持っている世代の人が、随分ここ何年かで引っ越しております。なぜ引っ越すのかというと。あと、またもう１つ、引っ越してこようと思ったけど、やめたという人もいるんです。それは、簡単に言いまして、やはり初等教育が十分でないというのが一番の理由です。 例えばもともと青梅に住んでいらして、一旦は結婚なさって都心部に引っ越す。そろそろ親も年だから帰ってこようかなと思っても、おじいちゃん、おばあちゃんから、青梅では子どもに十分な教育ができない、どうせ私立の中学へ行くならば帰ってくるなと。というようなことで引っ越してくるのをやめる。あとは、青梅から引っ越していくという例を、ここ、少なくとも青梅駅周辺で随分と広がっています。非常に優秀な御夫婦が育てていらっしゃるお子さんたちなので、もったいないなというような感覚でとらえていました。
会長	それは、それこそさきほどから議論になっている課題だな。どういうふうに表現にするかは別にして。それは、基本計画のところで大いに議論するテーマですね、きっと。
委員	先ほどお話のあったサスティナブルに関しては、お答えもあったんですけれども、青梅が考えている持続可能なまちというのは何かという説明を、もし、この言葉を使うのであればあった方がいいかなと思います。ただ、これは、一種のキーワードでもありますが、なんか流行語のようなところもあって、これからの１０年に向けてまたこの言葉を使うかどうかというのも、検討の余地があるかなと思っていました。最近は、スマートシティとかコンパクトシティとか、次の流行語もあるようですので、青梅でこれから１０年を考えた場合のキャッチフレーズとして使うかどうかも含めて、ちょっと考えた方がいいのかなと思います。 また、エネルギーと情報の問題というのがちょっと弱い感じです。情報に関しては、本当にほとんど出ていなくて、先ほど観光のお話もありましたが、観光というのは、情報発信の問題でもあります。それから、情報弱者への対応とか、市民同士の情報交流のお話とか、情報被害とか、そういうこともどこかにちょっと施策分野としてあってもいいのではないでしょうか。 それから、エネルギーも、自然再生可能なという文章はあるんですけども、今はもう東電に頼らないでというような話も出てきている時代に、じゃ、青梅はこれから、緊急時のライフラインだけではなく、日常的安定的なライフラインを行政としてどうやって確保していくのかというような話を、もうちょっと強調された方がいいかなと思いました。 それと、まちのあり方の視点と、まちづくりの基本方向は、これ、マトリックスにして、そこにこう実際の施策が出ていくというようなイメージでとらえられているのかなと思うんですが、地域資源の有効活用という、これはすごいいい視点だと思うのですが、その多様な地域資源が何を指しているのか、１６ページの地域資源の有効活用の説明として、「多様な地域資源を生かし」という言葉があるだけで、ここで言っている多様な地域資源というのはどういう

	ことなのかという説明がちょっと不十分。前の方の特性のところで読み取れるのが、豊かな自然と、それから、地域コミュニティがまだ残って機能しているというところですけども、ここで言っている地域資源の有効活用の地域資源というのが、どういうことを言っているのか。共通理解や説明があると、よりわかりやすくなるかなと思いました。
会長	それは承っておくということでいいですか。何かありますか。
事務局	はい。承ります。 基本的に意識しているのは、自然であり、文化であり、人材であり、あと、会長からも国宝2つを含む、いわゆる伝統文化というか、文化財が多くあるのに生かし切れていないというような指摘もある中で、そういった文化とか、あるいは、ストックというか、いわゆる施設、施設が非常に老朽化しているけども多いというのもございます。そういったところ、人材、施設、自然といったところを意識しておりますが、そういったところが書き込めるように工夫をいたします。
会長	ちょっと時間があるので余談的なことを言っていいですか。 去年、東京で、東京都が音頭を取ったんですけど、東京プロジェクト２０５０というのがあって、参加したんですけど、いろんな大学で、主に建築の人ですが、２０５０年の東京を描いてみよう。それは、一昨年もパリでやったものの焼き直しなんですけど。 それで、普通に４０年後こうなるって勝手に書いてもおもしろくないんで、情報の発達が我々の生活にどういう影響を及ぼしているかというのを調べたんです。歌と、映画と、漫画で調べたんです。 全部は申し上げませんけど、歌だけでいうと、１９３０年代ですから、昭和の初めぐらいですか、東京のまちを明るく歌った歌がすごく多いんです。ちょうど関東大震災から復興した年ですけどね。『東京行進曲』とか何とかかって。 １９６０年代になると、田舎から出てきて、希望に燃えて出てきたんだけど、うまくいかないよね東京生活はみたいな歌が多いんです。一番ショックだったのは、この１０年ぐらい、東京の地名が出てくる歌はほとんどない。一時期は赤坂とか、渋谷とか、新宿とかってありましたけど、今、全然出てこない。あのまちとか、このまちという言い方しか出てこない。やっぱりそれぞれのまちが個性を失っていて、作詞家が余り書く気にならないんじゃないかなと。というのが我々の結論だったんです。 だから、そういう意味で、余談ですけど、情報の発達が都市生活にどういう影響を及ぼしているかというのは非常に重要なテーマで、僕も興味持って、また研究、勉強を再開しようかなと思っているんですけど、なんか全然変わっていますよね、昔と。 つまり、子どもなんか見ていると、携帯の金使って、旅行に行ったり、スキーに行ったりというのは減っているでしょ、今、若者も。たしかスキー人口、すごい減っている。つまり、そっちに金使うんじゃなくて、携帯の方に金使っている。今後、それが青梅に対してどういう影響を与えるか、これは青梅だけじゃないですけど、かなり重要なテーマだと思いますけどね。

委員	今、そのお金を使わない若者というので、私は、商業と観光ということが私のここへ出てきたテーマだと思っているんですが、その中で、私の家族が『地球の歩き方』というガイドブックをつくっているんです、イタリア関連５冊ほど担当していまして。イタリア政府観光協会の動きとか、それから、イタリアがどういうふうに観光客をイタリアに運んでくるか。それから、イタリアにどういう人たちが、今、日本から行っているかというようなことを、ある程度知っているつもりでいるんですが、やはり、さんざん団体旅行を楽しんできた、いわゆる団塊世代か、年寄りのバックパッカーというんですか、そのような形でヨーロッパを旅をしている。ＢＰの１泊３，０００円、４，０００円のホテルに泊まったり、はたまた１泊１５万ぐらいのホテルに泊まったりというような使い分けをしてヨーロッパを旅している。 そして、年に１回、この間もあったんですが、イタリア政観なんかはワークショップをするんです。日本中の観光業者、ガイドブックをつくる人、旅行会社、それをすべて呼んで、自分のところを売り込むんです。例えば、あえてクローズしていた観光地というのがありまして、アラブの豪族だけを相手にしているスキー場なんていうのがありまして、ほとんどクローズしていたのが、今、日本人の富裕層を取り入れようとしている。アラブマネーが弱ってきたということなんでしょうけども。これは国の施策ですから何ともいえなんですが、やはり日本は、観光に対して力の入れ方が弱い。というか、何もしていない、無策だなと思います。 例えば青梅市に関してなんですが、青梅市もやはりそれにならってやはり無策だなと思います。 今、私たちはガイドブックを買わずに、旅行する場合にはほとんどインターネットで情報を入手します。その中で、やはり官が絡んでいますと、一軒一軒のお店を紹介するってなかなか難しい。だったならば、もう早くにＮＰＯのようなものにその情報発信をお任せしてみたらどうかなって思うんです。 これからは、やはり居住人口が減る以上は、外から来ていただいて、にぎわいと、経済効果。だから、例えば観光の経済効果というのも、観光バスでいらして、たった青梅の駅周辺に１５分か２０分いて、何も買わずに帰っていただくのならば、変な言い方ですけど、来ていただかない方がいい。やはりきちっと消費していただけるシステムをつくり上げたところに来ていただいて、その土地で手づくりされた産品、青梅らしい産品がきちっと評価された値段で動いていく、そういうような土壌をつくり上げたいと思うんです。 まずそのためには情報発信。市の職員が、あそこのうどん屋がうまいよとか、あそこの旅館がいいよとは言えないならば、それはもう民間がやる方がいいんではないか、それが本当の官民連帯なのかなと思います。その中で、なるべく良質なものを、もともと青梅には良質なものがたくさんありますので、そういうものを上手に産業としていけたらいいなと思います。
会長	委員の言うとおりだと思います。ヨーロッパの国を見ていると、観光はすごい力入れているよね。だって、何もつくらなくても人が来て、いっぱい金落としていってもらって、まちがにぎやかなんだ

	から、観光産業ってすごいですよね。
委員	前回、先生が馬路村のことをおっしゃったので、ちょっと数字を追ってみたんですが、たった１，０００人の村で、ユズの加工品だけで３３億。１人当たり幾らって考えたときに、恐ろしいと思ったんですが。だから、やはり民間が頑張って、行政がちょっと支えていただければ、やはりそこまでいくんだなという、すごくいい例だなと思いました。
会長	言われて思い出しましたけど、一時期、ずっと景観のことで熱海に通っていたんです。それで、市役所の人と行くとうまいところ連れて行ってくれるんだけど、普通に行ったら全然わからない。地元の人は知っているわけ。ガイドブックつくってくださいと言ったら、市でつくるわけにはいかんって言うんだね。不公平になっちゃうから。だったら、なんか勝手にＮＰＯみたいなのでつくってくればいいのにって言ったんだけど、まだできていない。 日本はそういうのはすごいだめだね。外国に行くと、星なんかがついているから、大体ランクはわかるじゃないですか。 それで、まずいなと思っていたら、だんだん変わってきていて、この間、仕事で九州の柳川に行ったんですけど、あそこはせいろのウナギというのが有名で、まちの中の４０何店舗のガイドブックができている。濃い味はこれですとか、薄味はこれですとか、それ、チラシで置いてあるんです。そろそろそういう時代だよね。来る人に、インターネットの情報もあるでしょうけど、どういうところを見てほしいとか、どこ行ったらどういううまいものがあるとか、どこ行ったらいい景色が見れるとかっていうのがない。地元の人は知っているわけ、うまいところを。だけど、観光客は全くわからない。それが日本の現状じゃないですか。
委員	今日のところは、基本構想素案についてどうするかということだろうと思うんですけれども。 青梅は、日本の経済が発展すると、東京が発展すると、そういう中で地理的条件はまあまあ恵まれていて、それで、その中で、青梅は、いろいろなニーズがあるけれども、まあまあよくここまで来たなと。一方で、内部でこういろんな変化が起きている。またこの１０年、これを備えなければ大変になる、こういう１０年だろうと。 どういうことかと言いますと、今まで言ったように、この前期の計画にしろ、前々期の長期計画にしろ、本当に恵まれて来たと。そして、今ここに立ってどうなのか。経済は国際化して空洞化する。一方では、少子高齢化が進んでくる。また、エネルギーの問題。これは大きな問題ですけれども、３．１１で、やっぱり都市の基盤、安全、こういうものが大きな課題になって、要するに人が生活する、あるいは、住みたい、こういうものに大きな課題が突きつけられているわけです、この１０年。そして、その基礎となる青梅の経済も、やっぱり税金、税収、これもこのままだとがたがたになる。 こういう認識の中で、この１０年、これを逆手にとって青梅は地域間競争に打ち勝って生き延びていくんだ、これについて、これが長期計画なんだと。前回言いましたけど長期計画は大鉈でいいみたいな気もしないわけではないんだけれども。というか僕はしていた

	んですけれども。 　どういうことかというと、少子高齢化、これを逆手にとって、子どもたち、若い夫婦、お金を持つ夫婦が住むようなまち、１０年にするんだ。震災に、防災に強い青梅だったら安心だよと、そういうまちにするんだと。そしてまた、エネルギー等も、これは確保できる、安心してというまちなんだと、だから青梅に住もう。そして、青梅には働く場があると。こういう１０年だと、これの方針を示すのが長期計画だろうと思って、前回も言ったんですけれども。 　ただ、これはなかなか難しくて、今回この素案が出て、そういう前回の議論、入ったような入らないような気もしているわけですけれども。本当に長期計画になるのかなと、僕は長期指針みたいになっちゃって、計画は違うんですよと、こうなれば、それもそうかなというような気もしないわけでもないんですけれども。 　それで、この第５回に至り、この素案が出た時点に至ったら、しようがない、この素案を認めた上でですね、やっぱり少子高齢化とか、子育て、こういうことも書いてもらっていますけれども、青梅市民を代表もしていますけれども、産業も代表しているということで言わせていただければ、課題等でそれなりによろしいのかなと。１０年後のまちの姿、これも最後のまちづくりの基本方向というところで、１８ページについてなんですけども、私の意見で言わせれば、活気ある産業で、雇用の生まれるまち。これについては、産業については、前回、申したと思うんですけれども、すべての基礎は金がなかったら何もできないというようなことで。そこのところで、①で、商店街の魅力向上や産業構造の多様化した中小企業の基盤などを支援する。②地域経済の確立、あるいは、地産地消、地域循環経済の確立を図り、商工業の振興を図る。それで、③新たな産業の育成、企業の誘致に努めて、市民の安定的な雇用の確保。よって税収も確保する。とういうことであります。
会長	これは、最上位計画だから。僕は、都市計画の方は知っていますけど、産業振興はどういう計画があるの？この下の。商業活性化とか。これは市でつくるんでしょう？
事務局	商業、工業に関する個別的な計画は、現行ではございません。実際に諮問機関としての商業審議会、工業審議会においていろいろな課題等について、諮問答申をいただいているという状況です。
委員	そのことに関して、東京、日本もそうだけど、青梅なんかももう空洞化して、商店街の空洞化、あるいは、工業地帯の空洞化、それによって雇用、あるいは、税収がなくなる。これについて強力なことをやらないと。青梅は安心なまちに住める、だから、１０年後も住もうと、あるいは、子育てが、という１０年の基盤がそうじゃないですかと言ったんですけどね。 　これを原則、基本にして考えればそういうことかなと。
委員	安心安全、人と人との支え合い、地域資源の有効利用というところで、まちづくりの課題なんですけど、とても大事なことだと思うんです。自治会加入率が激減しているんです。そういう中で人と人との支え合いができるのかと。それから、防災のところで、自治会

	長さん、すごく悩んでいらっしゃるんですけど、地域で何か起こったときに、地域の防災の連絡とか、見守りとか、支えをしなさいというふうにして市からおりているんですけど、自治会加入率が２０％ぐらいの地域では、だれがどこに住んでいるかということが把握できていないんです、自治会の名簿がないので。 　だから、そういうところを考えると、一番根底の生活の基盤を御近所で、６軒ぐらいの組でしか賄えないような状態ではなくて、自治会に入ると、若い方なんかは何のメリットがあるのなんてよく聞かれるんですけど、そういう自治会ではなくて、例えば防災コミュニティとか、防災ネットワークで地域がつながる。そのネットワークの基盤がきちんとできて、それで、青梅のまちは安心・安全、そういうところがきちっと整っているまちですよというふうな形でもっていけば、私も友達が阪神で被災しております。どんな状態かも知っていますし、実家の状態もぼろぼろになっているのもわかるんですけど、やはりそこで支え合えたのは、古くからきちっとした自治会の連絡網が取れていたので支え合えた、あそこに人がいるけれど、安否確認ができたというように、実際に体験していますので、やはり青梅のまちはとても、台風にもそんなに大被害に遭わず、本当にいい環境にあるんですけど、いざというときの一番のコミュニティづくりを、自治会とは別に、防災ネットワークで全員が加入できるような地域づくりというのを、課題の中に入れていただけたらなと思います。 　それから、子育てについても、青梅の自然のまちはいいから、おじいちゃん、おばあちゃんいるから、だんだん年を取るので、同居したいんだけど、帰っておいでって、若い世代の外部に行っているところに声かけますと、青梅は、今、住んでいるところより劣っているので帰れないという、そういう回答をいただいているという話も聞きますので、いずれは青梅に戻ってきたいよねというふうな子育て環境、子育ち環境が青梅にしっかりとあれば、自然環境を生かして、いいものができるんじゃないかなと思っております。
会長	自治会の加入率って、そんなに低いの？
委員	低いです。今年は加入率が５０．０８％です。西多摩地域の加入率でいくと、高いのは檜原村と奥多摩町で、あとはもう軒並み５０％以下です、羽村、福生。あきる野が７０ぐらいありますかね。今朝も、河辺駅と、東青梅の駅で、７時半から加入促進ということでパンフレット、ティッシュとを配って、自治会に入ってくれという運動をしてきたんですけれども、その時間、意外と、そこに来る乗客が少ないんです。極端に少ないです。多分、もっと早く行かなくちゃいけなかったのかって反省しているんですけれども、その時間はほとんどいないって言っていいぐらいです。 　それから、加入率の減っているのは、全国どこもそういう状況です。実は、先週、あきる野市で、西多摩郡の自治会連合会の役員等が集まって、首都大学東京の先生の講演、それから、懇談会等があったわけですけども、自治会加入率が全国的に落ちている中で、上げる方法を、先生、どういうのがありますかというのが、みんなの思いで言ったんですけども、それはございませんということでございました。

	青梅市は、市、それから、議会も、自治会連合会に対しては非常に協力していただいて、心配もしてもらっておりますが、その自治会加入率を上げるという方策は、ちょっと見当たらないです。
委員	自治会で、確かに青梅もそのようにやっているというのはわかりますけれども、今、森下町に住んでいまして、去年の市長との懇談会のときにそのお話が出たとき、私の住んでいる森下町は加入率１００％だと、そういうところもあるんだという話をした。僕も自治会に一応は名を連ねていますけど、そういう活動は全然していませんが。その１００％の原因というのは、どこにあるのかなと。というようなことも、やっぱり加入している参考として皆さんの助けになるようなことがあるならば、そこらあたりを掘り下げるなんてことをおやりになっているんでしょうか、なぜ、１００％なのか。
委員	なぜ、１００％なのかっていうの、ちょっとわかりませんけども、何で落ちてきたというのはわかります。加入率が減っているというのは。
委員	でも、落ちてきているのは、大体、予想できますけども、なかなか１００％を堅持するのはですね、例えば私の住んでいるまちが非常に古いまちだから。もっともみんな青梅は古いかもしれませんけども。人の流動が余りないとか、いろんなことの条件があるんでしょうけれども、そこらあたりを見てみたら、何かプラスの指針が得られるんじゃないかと思うんだけど、どうでしょうか。
委員	私の友人は小曾木に住んでいるんですけれども、小曾木の自治会加入率、すごくいいんです。どうしていいのって聞いたら、一事件があって、あの地域、地震で道がふさがれると、３日も４日も出てこれない。その地域でまとまらないとどうしようもない。だから、やっぱり地域がきちっと団結して、何かあったときにどうしようかということを話し合えているって。 私の住んでいるのは新町地域ですので、旧来の方と、新しい産業でいろんなところから集まった方がいて、人口も一番多いところです。学校も１学校、小学校で９００人近い人がいるので、やっぱりそこはいろんな考え方が、青梅市の中では一番自治会加入率、少ないですよね。
委員	少ないです。３０％。
委員	そう、３０％。もうちょっと少ないんですけど。 そこで、やっぱり何かメリットがあるかないか考えたときに、やっぱり防災ネットワークみたいなのできちっと連絡し合えるよってなると、若い世代は食いつくんじゃないかなって。その辺は、平和であることを願うんですけど、万が一のときの備えがあるというのと、別に何もないよというのとは随分違うかなと思うんですけど。
会長	タイミングという意味ではそれがいいね、きっと。いざというと

	きに入っていないとまずいですよって話だ。
委員	まさにタイミングというかですね、それは、この３．１１の以前から、阪神淡路のころから、自治会連合会としては、入っていないとこうだよとかいろいろやっている中で、いつ来るかわからないものに、そんなところに、煩わしいところに入りたがらない。 それから、加入率が何で落ちてきたというのは、今まで自治会に入っていた人が、年齢的にもう動けない。何かの行事があっても出られない。それから、組長さんが来ても、金集めもできない。だから、抜けたいという、抜けたいという意識を持っている人がいっぱいいるわけです。それがこの年度がわりで、大きく落ちちゃうわけですから。 それから、もう１つは、メリット、デメリットということを言うわけです。自治会入っていてどんなメリットがあるのとか。それこそメリットなんかないんですよね。そのメリットというのは、例えばこれだけ、何かやるのに、報酬が来るとか、そういうものだってないですから。 そうすると、メリットは震災が来たときに、まとまって避難もするだろうし、お隣の人の安否も気遣うだろうし、まず、自分の身の安全、お隣、家族、そういうものからという話をしても、そんなのは、いざ地震が来れば、自治会に入っていようがいまいが、みんながもう見るようになるっていう、見透かされているわけです。それで、今度は地震が起きたとき、その後の対応は行政がやってくれるという意識が依然と強いわけです。そんなことはできないよって言っているんですけども。そして、自治会に入っていれば、支援物資等が、その自治会単位あたりに来るんだろうけれども、あなたは自治会に入っていないから、あなたのとこには水やれないよ、御飯をやれないよって、そんなことはできないだろって、もうそっちの方にいっちゃっているんです。 今、先生がおっしゃったように、ここの３．１１の震災を機会に、自治会連合会としても、そっちの方でもう一度、立て直そうとしております。
会長	僕は、強制加入かなと思って。うちももちろん入っていて、横浜ですけど、青葉区ってところですけど。どのくらいの頻度かな、今日は道の掃除の日だからって、みんなでやっていますよ。
委員	横浜市は８０％だそうです。
会長	何で青梅はそんな低いんだろう。 やっぱり東京の人の方が冷たいのかな。そんなことないと思うけど。
委員	でも、墨田区なんか８０％です。
会長	いや、そりゃそうだろうね、下町で。 そろそろ時間なので、全然発言されていないので、一言、二言。

委員	先ほどの４のまちのあり方ですか、それと、５のまちづくり、これはマトリックスということでございますから、縦糸、横糸ということで理解すればいいんだなと思うんです。 それから、いろいろな御意見、御質問が出ていた中で、一番気になるのは、青梅の人たちだけで何かをやっていくといった場合に、商店街の活性化というのは難しいんだろうと思うんです。物を買うというのは、大きいところへ買いに行っちゃうかもしれないし。ですから、やはり商店街が活性化して、それが原点でまちがにぎわっていくためには、外からの人たちがより大勢来ることが大事だろうと思うし、外の委員はどうしたら来れますかと、青梅に住むようになりますかという御意見もありましたけど、今回書いた中では、例えば震災で、大田区で被災したときに、青梅に逃げ込めるように、あらかじめ空いた家でも、何かでも、権利をつけておけるような、そういうやり方もあるだろうし、あるいは、空いている農地をみんなに貸すというようなのもあるだろうと思うんです。 今日、東青梅の駅で、出るときに青梅の広報紙を、置いてあったのでもらってきたんですけど、この中で、広い農地の貸し出しの募集が出ていて、非常に広い、一区画１００平米あります。抽選ですと。まだ間に合うなと思ったんだけど、申し込みは市内在住、在勤者と。そうすると、僕が応募をして、これを御縁にして、どこかのお宅と仲よくするということで、月に１回ぐらいとか週に１回、青梅に来るということはできないなと思ってしまいますね。 青梅の方々は昔からお金があって、ゆとりがあって、お祭りと、消防団活動を一生懸命やっていてくれて、大変いいんですけれども、だから、余り開放しないんじゃないのかなと、そういう感じがするんです。 ノーマライゼーションとか、外国人ももっと受け入れようよということが、青梅の方々の意に沿うかどうかはわかりませんけれども、新大久保は新大久保でコリアンタウンでいいですけれども、青梅に地球上のあらゆるところからの人たちが、あいたお店でもって、うちの国の商品を出して、うちの国の人間を呼ぶんだとかということがあっていいのかなと思うんです。ぜひ、商業が活性化するように青梅の商品をつくってもらいたいと思うし、それから、青梅に行かないと楽しめないというものができるといいなと思うんです。 残念ながら、僕も年に何回か青梅に来るんですけど、青梅に来ないと買えない物ってないですよね。お米を買うっていうと、山梨のフルーツセンターに買いに行ってしまうし、キノコを買うっていうと、青梅街道をもっと真っすぐ行って、奥多摩の先の山小屋に買いに行ってしまうし、しょっちゅう通過はするんです。ぜひ、青梅に来ないと、ユズだけで３０億も売れるのなら青梅でもやったっていいと思う。そういう意味で、地域ごとに、黒沢に行ったらこういうものがあるよとか、農産物でも何でもいいですから、ある意味、魅力をつくっていただければ非常にいいだろうと思うんです。 それは、計画の中でいろいろお書きいただければいいことで、枠組みは私としてはよろしいんじゃないかと思います。
会長	これも、基本計画の方にかなり生きてくると思います。

委員	前回とその前と、２回会議を欠席させていただきました。それで、内容のわからないまま役所の方の方から、御自分の意見を書いてくださいということを言われたので、私が最初に書いたのは、本当に具体的な今の青梅のまち並みについてとか、この観光とか、それで、今こう出ている細かい意見を出させていただきました。 私たち市民が生活していて感じることというのは、やっぱり具体的なことになるわけなんです。そういった意見がこの場でどのくらい反映されていくかなというのが、ちょっと私はすごく疑問に思ったんです。 今のお話ですと、この構想ができて、その後から具体的な意見になるということなので、反映されることを祈っているんですけども、やはりこの中は、先ほど言われていたように、どこにでも通用するような、きれいな文でまとめられた、だれでも納得ができるような文だったと思います。そんな中で、青梅市ならではの、やっぱりここが不足しているとか、ここをこうしていかなければいけないんだという意見を、これから細かく出していって、それが反映されていってほしいなということを、今までの出た会議の中で願っております。そういった細かいところですと、いろいろな、私なんかでも意見が出せるのかなというふうに思っております。
委員	情報の話が、多分、僕としては一番メインの分野ですので、そこの話と、あとは、ちょっとプラスアルファ１、２させていただきたいと思うんですけど。 次の段階で、構想から計画の方に入っていくときの問題かもしれませんけど、情報の扱い方について、戦略というようなものを、それこそ１項目大きく割いていただきたいというのが正直なところです。予算としても、僕が勝手に言うんだったら、市の予算の１割ぐらい、情報のために割いてもいいんじゃないかというぐらいに思っています。具体的には、情報の収集、そして、発信、流通させるということで、ターゲットとしては、市内の市民へ向けての情報提供。もう今現在、非常に手薄ですし、また、市外の方への情報発信というのも手薄だと思っています。でも、情報の持っている力というのは非常に強いので、そこはもっと活用していった方がいいだろうと。 例えば僕の知っている事例で、正確なところは忘れてしまったんですけど、何年か前に、たしか広島の県警か何かの管轄エリアで、いわゆる振り込め詐欺がすごくはやり始めたころに、１人の警官が、振り込め詐欺のパターンはこういうのがありますよっていうのを持って、１軒ごとに回って、そうしたらその地域の振り込め詐欺の被害が、ほぼゼロになったという事例があるんです。それは、わずか１人の１部署がつくって、その人がひたすらまちを歩いて行くという形での情報の提供ですよね。そういうのができれば、実際に被害を防げるとか、そういうことが事例としてあるので。 もうこの段階に至っては、青梅市は、多分、はっきり言って日本の国もそうですけど、倒産と言っていい状態だと思っていますので、そこではなりふり構わずいろんな情報提供していくべきだろうと。あらゆるメディアを使ってやっていくことがきっと必要で、その際には、行政サイドが、前例にこだわったりとか何だとかっていうことではなく、垣根も何も取り払って、必死に情報を活用するべ

	き時代、ほかのまちよりも先にリードして情報を活用するべき時代だと思っています。 　例えば、３月３日に『アド街ック天国』という番組で青梅が取り上げられる。そうしたら、市内の放送で、３月３日見てよって言っちゃってもいんじゃないかと。でも、それを言うことで、市民はその番組を見る、見たら自分の知っている市内が出ていて、向こう１週間ぐらいはその話題が結構出ますよ。そうしたら市民が元気になる。市民が元気になるんだったら、今までの前例その他、排除してでもやってみる価値はあるというような考え方に立っていただければ、やっていけるんじゃないか。それは、産業の支援なんかについても同様だと思います。 　あと、もう１つのポイントは、災害の対策ということ、まあ、先ほど自治会の話とか出ましたけど、青梅はまだまだそれでも自治会の加入率はそこそこあると思いますし、消防だとかそういうところが強いところでもあって。神戸で震災があったときのある報告書の中で、震災に遭ってしまった、そのときにいろんなものが不足していったんだけど、最後まで確保できなかったのは水だという話があるんです。２日目、３日目あたりに食糧は入ってきたけど、水が最後まで入ってこなかったと。 　それを考えたときに、青梅は、水資源は多分あると思うんです。例えば井戸だとか、沢だとか、そういうところの水質調査、放射線の調査、そういうことをあらかじめしておいて、水を提供できるまちってそんなにないはずなので、そういう部分も含めて防災の計画を立てていく。そのときに、じゃ、水を提供するときにだれにやってもらおうといったときに、消防団の組織にぜひ協力してもらおうとか、自治会の組織に協力してもらうだとか、そういうマニュアルをちゃんとつくる。緊急時にはマニュアル、よく考えられたマニュアルを、そのステップを踏んでいくことが、多分、大事だと思いますので、そういうのをつくっていっていただきたい。 　あと、先ほどほかでも話が出ましたけど、広域の拠点みたいなので、あるところのうわさでは、明星大学さんが、６年、７年、８年後ぐらいに青梅キャンパスを閉鎖するんじゃないかという話をお聞きしました。これは、青梅市としては絶対に何とかストップさせるべきだと思っています。あそこが明星大学である限りは、防災拠点としても使えますし、もう既に２０年あって、文化の発信基地ですし。もし、その話が本当であったら、何とかしてあそこにキャンパスを残していっていただく。あそこに学生がいてくれる限りは、いざというときには使えるはずですし。そういう方向も考えていっていただけたら、うれしいなと思います。 　ちなみに、この間、明星大学が青梅活性化プロジェクトというのをやっていて、毎年発表会をやってくれるんですけど、まことに残念ながら、市役所の方はほんの少数しかお見えになりませんでした。そのときに学生たちは、例えばさっき出た、あのキャンパスの中にいろいろ貸し出すスペースをつくってみたらどうだというアイデアを出してくれたりとか、あと、新聞記事にもなっていましたけど、今の青梅市のホームページ、あれじゃだめなんじゃないの、こういうふうにつくったら、もっといろんな人が来てくれたりとか、そういうつくりができるんじゃないのというプレゼンテーションをしてくれたんですけど、そういうのもどんどん取り入れていってい

	ただきたい。 　もう、僕の実感ですけど、なりふり構わずでいいですから、青梅を強くしないと、いいアイデアたくさん取り入れてやっていかないとつらいんじゃないかなと。災害対策も、もう数年のうちに大きな地震が来るというような予測まで出されて、なるべく早めに、なりふり構わず。でも、予算は限られているでしょうけど、知恵を使って、みんなが走り回れば、きっとできることはいっぱいあって、青梅市のいいところを外へ行ってしゃべってくるだけでも絶対効果があるはずなので、そういうことも情報の戦略として、情報を仕事としている者としては、それこそ１章立てていただいてもよいんじゃないかと思っています。
会長	いろいろ意見をいただきました。それで、大きな点は、もうちょっと青梅のことについて具体的に書いてくれ、一般論じゃなくて、ということが１つ大きかったです。それから、２番目は、持続可能なんとかっていう、その言葉遣いの問題で、これもどう修正するかという話ですね。 　それから、今日いただいた意見は、これは基本構想に生かせる、これはやっぱり基本計画の方だというふうに、事務局の方で割り振りをしてもらって、それで修正したいと思います。 　先ほど、説明がありましたように、本年度はこれで終わりなので、修正して、この素案を議会に出す、それから、市民に向けて出すというときに確認が必要なんですが、一応、私に任せていただくことにして、それでよろしいでしょうか。みんなの目に触れるわけですから、随時連絡が取れれば相談をしていただいて、なるべくいいものに仕上げたいと思います。よろしくお願いします。 　今日はこれで終わりでございますが、その他、次回の開催についてということがあるので、事務局から説明できますか。
事務局	本日はありがとうございました。 　今、会長からお話がございましたとおり、本日の審議会をもちまして、今年度内の開催につきましては最後となります。また来年度、引き続きお願いしたいと思います。 　次回につきましては、この後、市議会への中間報告、また、その後、パブリックコメントという形で進めさせていただきまして、また意見を取りまとめた上で、内容の検討を行ったものを、また審議会の方へお示しするという形で予定してございます。４月下旬から５月中旬ぐらいまでの間で、改めて日程の調整をさせていただきたいと考えております。決定次第、御連絡を申し上げたいと思いますので、よろしくお願いいたします。
会長	以上で今日はこれで終わりでございますけれども、皆さんが極めて熱心な姿勢でこの会議に取り組んでおられるということがよくわかりまして、心強いと思っております。 　本日はどうもありがとうございました。 （散会）